

3 果樹

(1) モモ <露地栽培>

本県のモモ栽培は、褐色森林土地帯に多く、その他褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土が浅いため、土壌診断に基づき良質な完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、ハダニ類の天敵を保護・利活用することにより、ハダニ類に対する薬剤防除を節減する。あわせて多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用量を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用量を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 9.6kg/10a以下* 14.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：ハマキムシ類、シャクトリムシ類、ケムシ類等 ○多目的防災網を使用する。 ○性フェロモン剤を使用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：モモハモグリガ、ハマキムシ類、シンクイムシ類、コスカシバ等 ○抵抗性台木を利用する。 (対象病虫害：ネコブセンチュウ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯、シルバーフィルム等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 24回/年以下* 29回/年以下**
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t / 10 a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t / 10 a)でもよい。 	

注1) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*早生種、**中～晩生種

(2) リンゴ

<露地栽培>

本県のリンゴ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土地帯等にも分布している。このうち褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬の使用を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、ハダニ類の天敵を保護・利活用することにより、ハダニ類に対する薬剤防除も節減する。あわせて多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用量を節減する。

また、除草には機械除草を行い、除草剤の使用を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素成分量 6.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：ヒメボクトウ、ハマキムシ類、シャクトリムシ類、ケムシ類等〕 ○多目的防災網を使用する。 ○性フェロモン剤を使用する。 〔対象病害虫：ヒメボクトウ、キンモンホソガ、ハマキムシ類、シンクイムシ類〕 ○抵抗性台木を利用する。 (対象病害虫：リンゴワタムシ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯、シルバーフィルム等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用回数 33回/年以下
その他の留意事項	○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(3) 日本ナシ <露地栽培>

本県のナシ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土、黄色土地帯にも分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても、生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬や多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 	化学肥料窒素分量 20.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 対象病害虫：ヒメボクトウ、ハマキムシ類、ケムシ類、シャクトリムシ類等 </div> ○多目的防災網を設置する。 ○性フェロモン剤を使用する。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 対象病害虫：ヒメボクトウ、ハマキムハ類、シンクイムシ類 </div> ○抵抗性品種を利用する。 (対象病害虫：黒斑病等) ○光利用技術(黄色蛍光灯等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 殺虫剤 8回/年以下 合計 34回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) カキ <露地栽培>

本県のカキ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土地帯にも分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 8.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 } ○機械除草を行う。 ○光利用技術（シルバークリアフィルム等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 8回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(5) ブドウ <露地栽培>

本県のブドウ栽培は、巨峰、高尾などの大粒種を中心として、褐色森林土地帯、褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、生物農薬の利用や被覆栽培による果実腐敗性病害の発生を低減し、化学農薬の使用節減を推進する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 4.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 ○被覆栽培を行う。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：黒とう病、晩腐病 べと病等 ○抵抗性台木を利用する。 (対象病害虫：フィロキセラ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 19回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(6) オウトウ <露地栽培>

本県のオウトウ栽培は、褐色森林土地帯、褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬の利用や被覆栽培による果実腐敗性病害の発生を低減し、化学農薬の使用節減を推進する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 9.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 ○被覆栽培を行う。 (対象病害虫：灰星病、炭そ病等) ○性フェロモン剤を使用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハマキムシ類、コスカシバ シンクイムシ類等 ○光利用技術（黄色蛍光灯、シルバーフィルム、粘着資材等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 15回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(7) スモモ

＜露地栽培＞

本県のスモモ栽培は、県北地方を中心として褐色森林土地帯、褐色低地土や黄色土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬の利用により化学農薬の使用節減を推進する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 <ul style="list-style-type: none"> 〔対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等〕 ○多目的防災網を設置する。 ○性フェロモン剤を使用する。 <ul style="list-style-type: none"> 〔対象病害虫：ハマキムシ類、コスカシバ シンクイムシ類等〕 ○光利用技術（黄色蛍光灯等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 15回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(8) 西洋ナシ <露地栽培>

本県の西洋ナシ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土、黄色土地帯にも分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても、生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬や多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 11.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類〕 シャクトリムシ類等 ○多目的防災網を設置する。 ○性フェロモン剤を使用する。 〔対象病害虫：ハマキムシ類〕 シンクイムシ類 ○光利用技術（黄色蛍光灯等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 28回/年以下* 31回/年以下**
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注1) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*早～中生種、**晩生種

(10) キウイフルーツ <露地栽培>

本県のキウイフルーツ栽培は、相双地方や県北地方、県南地方を中心に褐色森林土地帯、褐色低地土地帯、黒ボク土地帯に分布している。褐色森林土など腐食量が少なく、表土の浅い土壌では土壌改良を目的として、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。また、地力を維持し、高品質果実を安定生産するためにも完熟たい肥を施用する。施肥は、地力を維持するとともに土壌環境保全の面からも有機質肥料を施用する。

除草は、機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素成分量 16.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。	化学農薬使用回数 5回/年以下
その他の留意事項	○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(11) ウメ <露地栽培>

本県のウメ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土、黄色土地帯にも分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減して有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤を利用して防除法を推進する。また、生物農薬の利用により化学農薬の使用節減を推進する。

除草は機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 <div style="display: flex; align-items: center; margin-left: 20px;"> { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 </div> ○性フェロモン剤を使用する。 <div style="display: flex; align-items: center; margin-left: 20px;"> { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：コスカシバ ハマキムシ類 </div> ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 7回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(12) ブルーベリー <露地栽培>

本県のブルーベリー栽培は、黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土、褐色森林土地帯に分布している。ブルーベリーは細根で根域が浅いため、生産の安定と品質の向上を目的に、バークやおがくずなどの粗大有機物を表面施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

除草は機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○石灰資材が添加されていない完熟たい肥を施用する。	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素成分量 7.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類〕 シャクトリムシ類等 ○防虫ネットを使用する。 ○バークやおがくず等マルチ栽培を行う（対象：雑草） ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用回数 3回/年以下 約10cmの厚さのマルチ
その他の留意事項	○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○土壌を酸性に維持する（最適pHは4.3～4.8）。 ○苦土欠乏症が発生しやすいので、土壌診断に基づき苦土を施用する。 ○たい肥は、豚ふん等の肥料効果の高いものをさけ、牛ふんたい肥（オガクズ等混合）の完熟たい肥を使用する。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 ○ブルーベリーは非常に水を好む果樹であり、浅根性であることから樹冠下をマルチ管理することが望ましい。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(13) ネクタリン <露地栽培>

本県のネクタリン栽培は、褐色森林土地帯に多く、その他褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土が浅いため、土壌診断に基づき良質な完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、ハダニ類の天敵を保護・利活用することにより、ハダニ類に対する薬剤防除を節減する。あわせて多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用量を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 14.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 ○多目的防災網を使用する。 ○性フェロモン剤を使用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：モモハモグリガ、ハマキムシ類、シンクイムシ類 コスカシバ等) ○抵抗性台木を利用する。 (対象病虫害：ネコブセンチュウ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯、シルバーフィルム等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 19回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。